令和 ４ 年度　さいたま市立与野南中学校　学校だより
み　な　み　か　ぜ

南　風

第　６　号
令 和 ４ 年 ８ 月 ２６ 日発行
http://yonominami-j.saitama-city.ed.jp

＜学校教育目標＞ 進んで学ぶ生徒　心豊かな生徒　心身共に健康な生徒

今夏の思い出

校長　　吉　原　誠　士

在学中の子どもや学校関係者が使う「夏休み」という表現は、世間での「夏の休暇」とは少々意味が異なります。私たちにも休むことができる日数には決まりがあり、部活動や様々な事務的な処理もありますから、「先生という職業は夏に４０日の休みがある」というのは大きな誤解です。・・・もっとも、授業がありませんから、気持ちに少し余裕ができるのは確かです。ここで大切になるのは教員には研修という名前で充電を求められていることでしょう。心身のリフレッシュと同時に勉強もしなければならない訳で、その点は生徒と一緒です。そう言いつつも、私自身は様々に妄想していた旅行計画を実行に移せないまま、とうとうツクツクホウシの声を聴くところとなりました。このセミが鳴き出すと、炎熱から解放されると同時に忙しい日々に引き戻されることを実感し、複雑な気分になります。

今年１月から介護に関わり、６月には緩和ケア病棟での面会に通うようになりました。そのような日々の中で、“大変な”お仕事をされる人々とお話ができたことは大いに勉強になり、これこそ今夏の“成果”だと捉え、自分への励みにもなりました。教員は「毎日大変でしょう」と声をかけられることも多い職業ですが、ここの病院関係の方々と接してしまうと、自ら「はい大変です」などと答えることが恥ずかしく感じられるようになります。

元々この病棟は、病状の進行に伴って生じる肉体的な痛みや苦しみを和らげ、気持ちを楽にすることが目的だったようですが、現在は治療を施し退院まで関わり続ける場所となっています。めでたくお家に帰る人を見送る一方、空しい思いをすることも多いであろうことも推察されます。ここにお勤めする方々にはそれなりの決意と覚悟があるとしても、目の前を多くの人たちが“通り過ぎる”ことには苦しい思いを抱いていらっしゃることでしょう。しかしその苦悩を表に出さず、入院患者やその家族に希望を与え、勇気をもたらすような笑顔を保ち続けるスタッフに感嘆しました。老いを迎えて、生きるために必要な身体の機能を失いつつある重篤な病状に対して、求められるところをすべて察し、過酷ともいうべき要求にも応じながら、安心感のある表情を崩さないのです。翻って自分を振り返ってみると、気分によって他人との関わり方を変えていないだろうか、相手の言い分が不都合だからと不機嫌に応じていないだろうか・・・同じような純粋な気持ちの持ち主ではない自分を反省せざるを得ません。

立秋を過ぎて一段落となり、故人の装束を整え、化粧を施していただけました。生きることを助け、気遣いするだけでなく、生を全うした姿になお敬意を表し見送ることは誰にでもできることではないでしょう。そのような職場に毎日通っていて、特に気持ちの面で確かに“大変”なのにもかかわらず、お勤めの方々は自分が“大変だ”と言おうとしません。・・・教職にある私が“他人に寄り添いきる”とはどうすることなのか・・・考えてみたいものです。

※　私事ながら戸田中央病院緩和ケア病棟の皆様に深く感謝し、これからのご活躍を祈念致します。